



*The Sky Maiden*

天人女房

**Japanese Text by KAZUKO INADA**

**English Text by TADAAKI MIYAKE**

**Illustration by NAHO INADA**

いなだ かずこ：さいわ

みやけ ただあき：えいやく

いなだ なほ：え

さかい みゆき：だいじ





**Once upon a time, there lived a young hunter with his dog.  
One day he went hunting in the mountain and passed a lake,  
when what did he see but three beautiful maidens  
come flying down from the sky?  
They took off their clothes and began to bathe in the lake.**

むかし、あるところに、ひとりものりょうしがおって、いぬといっしょにすんでおった。  
あるひ、りょうしが やまへりょうにいこうとして、みずうみのほとりをとおりかけたら、  
そらからうつくしいおんが さんにん ふわふわと まいおりてきて、きものをぬぎ、  
みずうみで みずをあびはじめた。



**The hunter hid himself in the poppy bush and watched the maidens.  
After a while two of them put on their transparent clothes and flew up into the sky.  
The last one, however, wanted to stay longer, saying, "I'd like to see those flowers more."  
The hunter wished to have her as wife and so stole her clothes away into his belongings.**

おんなが あまりうつくしいもんだから、りょうしは そばのケシばたけに かくれて みとれておった。  
そのうちに、ふたりはみずあびをやめ、すきとおるように うつくしいはごろもを まとって、  
てんへかえっていったが、のこるひとりは「わたくしは もうしばらく このはなをみたい」と、  
ケシのはなを うっとりながめていた。

りょうしは てんにんにひとめぼれしてしまい「こんな うつくしいおんなを にようほうにしたら、  
どんなによからう」とおもって、さっと はごろもをとって、にもつにかくし、しらんぷりをしていた。







When the maiden found her clothes gone she began to weep bitterly.

Then the hunter made his appearance in front of her, and pretending to be kind, said to her. "What is the matter with you, maiden? What is your trouble?"

"I've lost my clothes, which would enable me to fly back to the sky."

"Oh, don't weep any more. You can come with me to my house."

しばらくたって、てんにんは はごろもをきようとしたが、どこにもみつからので、しくしくなきだした。りょうしはすがたをあらわして やさしくいった。

「どうしてなくんか。きものがないんか」

「はい、はごろもがないので、てんへ かえれないのです」

「なかんでもいい。てんへかえれんのなら、おれのところへこい」





How could she have refused?  
Soon they got married, and in due  
course a boy baby was born to them,  
and then a girl baby.  
What a happy family!  
However, there was not a day when  
the mother did not think of her sky home.

しかたがない。  
おんなは いわれるままに、りょうしとくらすうちに、  
ふたりはふうふになって、やがて おとこのこがうまれた。  
つづいて おんなのこがうまれた。  
しあわせなくらしだったけれども てんにんは てんのこと  
を  
おもわぬひは なかった。





One day, the mother came home rather suddenly and found her son nursing his sister by singing a lullaby, which he had learned from his father.

“Don’t cry, oh my good girl,  
And I’ll show you the clothing,  
By which you could whirl,  
Under the straw in the building.”

The mother dashed into the barn and found her clothes under the bundles of rice straw.



あるときてんにんが こどもをおいて でかけていたとき、いそいでいえにかえってみると、したのこがないており、  
うえのこが こもりうたをうたってなだめていた。  
それはちちおやから おぼえたうただった。

なくな。よいこじゃ、ねんねんよ  
あまのはごろもを みせるから  
あまのはごろもは どーこどこ  
せんばいねの そこづみ

にようほうは おどろいてなやにかけこみ、  
いなたばのしたに、つつみを見つけた。

**When the mother put on the clothes,  
a strong desire came to her to fly back into the sky.  
She took the boy in one arm and the girl in the other.  
They went up into the sky looking as if they were dancing.**

はごろもをひろげてみると、てんにんはてんのくにが  
なつかしくてたまらんようになり、みにまとしてみた。  
そのとたん、からだがすうっとういてきたので、  
おんなはいそいでこどもをひとりずつわきにかかえ、  
にわにはしりで、まうようにてんへのぼっていった。

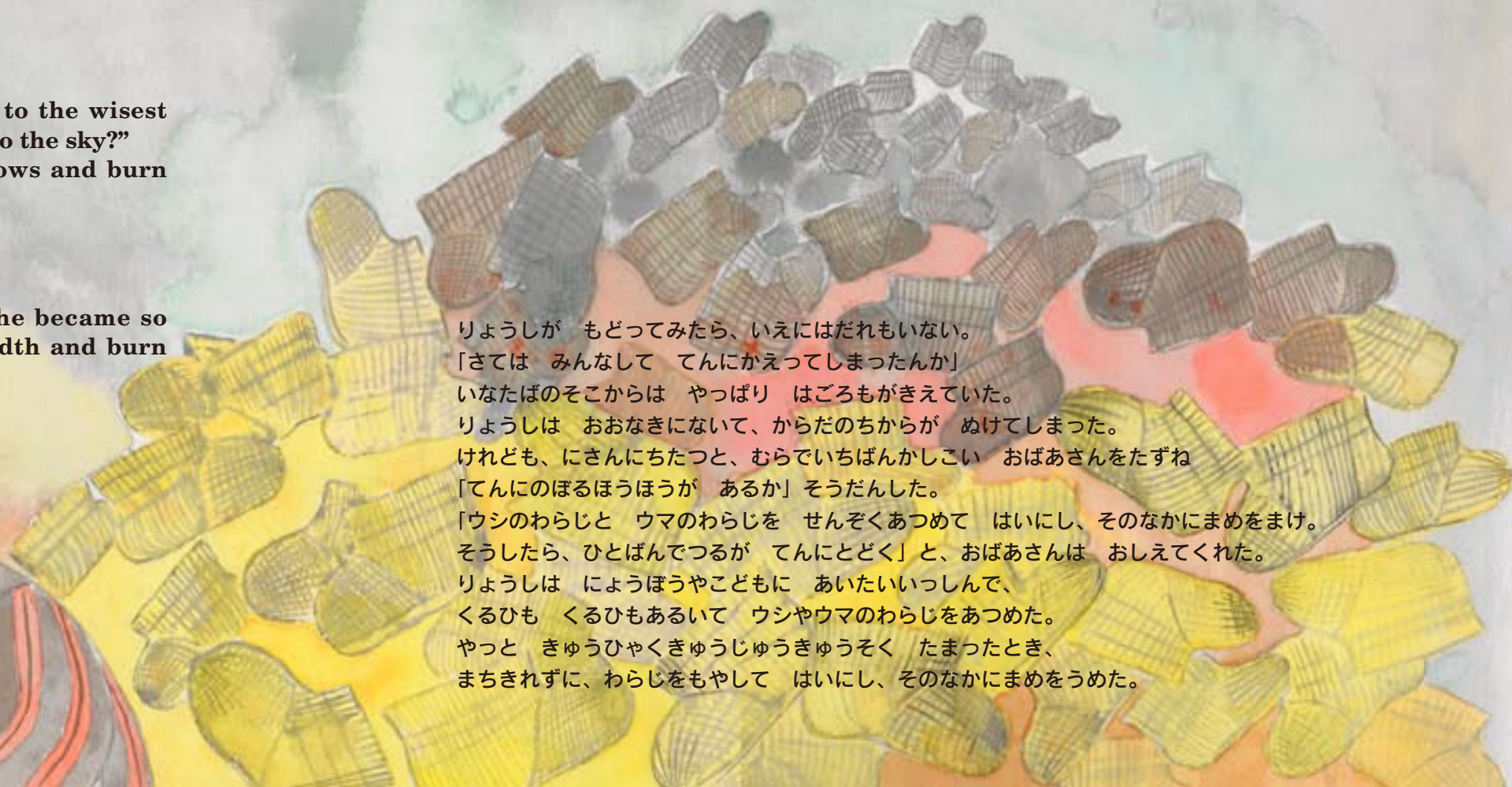




When the hunter came home and found the house empty,  
he hurriedly went into the barn.  
There were no clothes to be found under the straw.  
He knew that his wife and children had gone back to the sky.  
After weeping and lamenting for full three days, he went to the wisest  
woman in the village and asked her, "Is there a way to go up to the sky?"  
"Collect a thousand pairs of straw boots for horses and cows and burn  
them. Then you put a bean in the ashes.  
The bean's stalk will reach the heaven in a single night."  
The hunter collected straw boots every day.  
So great was his desire to meet his wife and children again.  
When he collected nine hundred and ninety-nine pairs, he became so  
impatient that he could not wait until he got the thousandth and burn  
them.



りょうしが もどってみたら、いえにはだれもいない。  
「さては みんなして てんにかえってしまったんか」  
いなたばのそこからは やっぱり はごろもがきえていた。  
りょうしは おおなきになくて、からだのちからが めけてしまった。  
けれども、にさんにちたつと、むらでいちばんかしこい おばあさんをたずね  
「てんにのぼるほうほうが あるか」 そうだんした。  
「ウシのわらじと ウマのわらじを せんぞくあつめて はいにし、そのなかにまめをまけ。  
そうしたら、ひとばんでつるが てんにとどく」と、おばあさんは おしえてくれた。  
りょうしは にようぼうやこどもに あいたいいっしんで、  
くるひも くるひもあるいて ウシやウマのわらじをあつめた。  
やつと きゅうひやくきゅうじゅうきゅうそく たまったとき、  
まちきれずに、わらじをもやして はいにし、そのなかにまめをうめた。





On the next morning, the hunter found the bean's stalk having grown into the sky. He started to climb the stalk with his dog. Day and night they continued climbing, and finally they came to the top. But, alas, it had not reached the heaven by a few feet.



あさ、おきてみたところが、ほんにまめのふといつる  
たかくのびて、さきはくもにかくれて みえなかつた。  
りようしはよろこんで、ぐんぐん つるをのぼるし、  
いぬもついでのぼつた。  
よるもひるものぼつて、とうとう てっぺんについたが、  
おいしいことに、もうちよつとで てんにとどかん。





**He let the dog go first.  
The dog jumped up to the heaven,  
and the hunter took its tail and managed to get onto the heaven.  
Look! What a wonderful and spacious village!  
The wife, who had been waiting, with much exultation, exclaimed,  
“It is so nice of you to come all the way up here.”  
The children, too, were happy to see their father again.**

そのとき、いいあんばいにいぬが ぴよっととびあがったんで、  
そのしっぽにつかまって、りょうしはやつとてんへ あがることのできた。  
あがってみると、ひろびろしいむらがあつて、  
にようほうは「こんなところまで、よくきなさった」とよろこんでくれ、  
こどもはちちおやに とびついてきた。



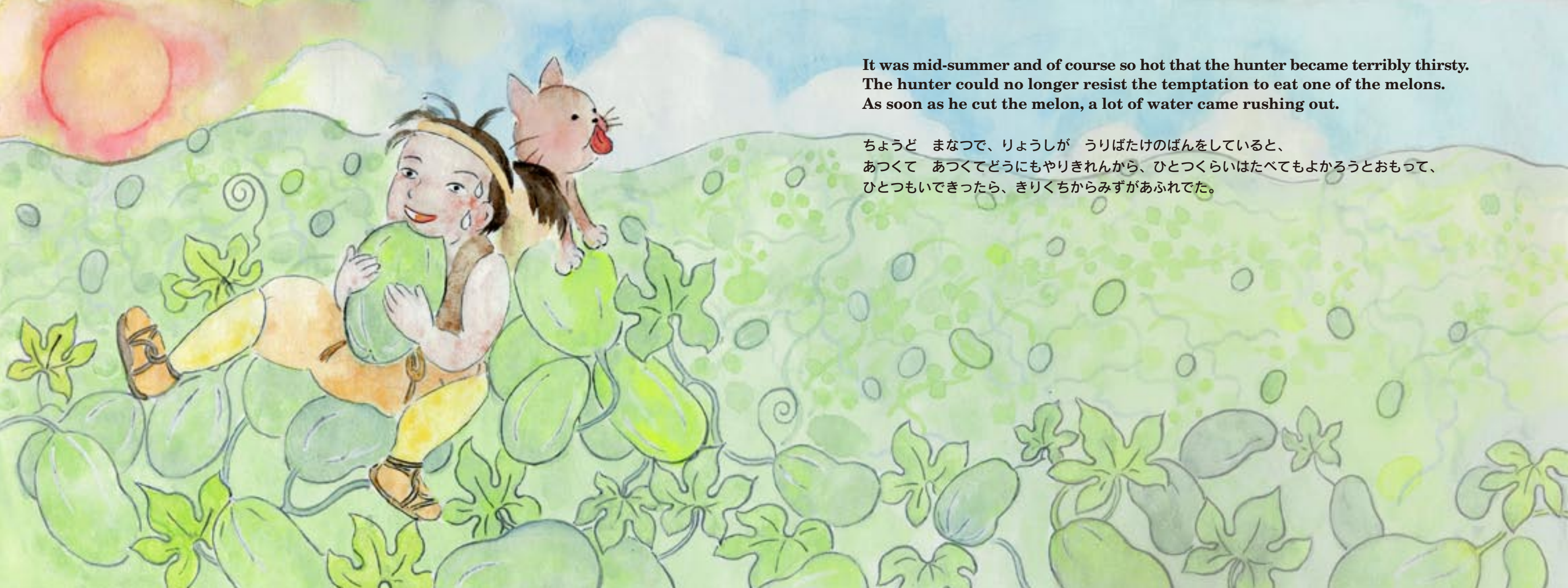
The hunter greeted his father-in-law and asked,  
“Could I stay here with my family?”  
“If you can guard the melon field all right, I will grant it to you,”  
was the answer of the unwilling father-in-law.  
“Don’t touch any of the melons, however thirsty you may become,  
or you will repent it terribly” the wife warned the hunter secretly.



りょうしは うれしくてかなわん。  
にようぼうの ちちおやにあいさつして、「ここにおいでください」といって、  
あたまをさげたけれども、ちちおやはむすめが  
げかいのにんげんとむすばれたのが きにくわんで  
「うりばたけのばんをしてみろ。それができるまでゆるさん」とにらみつけていった。  
にようぼうはりょうしに「どんなにのどがかわいても、うりをたべてはいけません。  
たべたらおおごとになります」と、そっとおしえた。



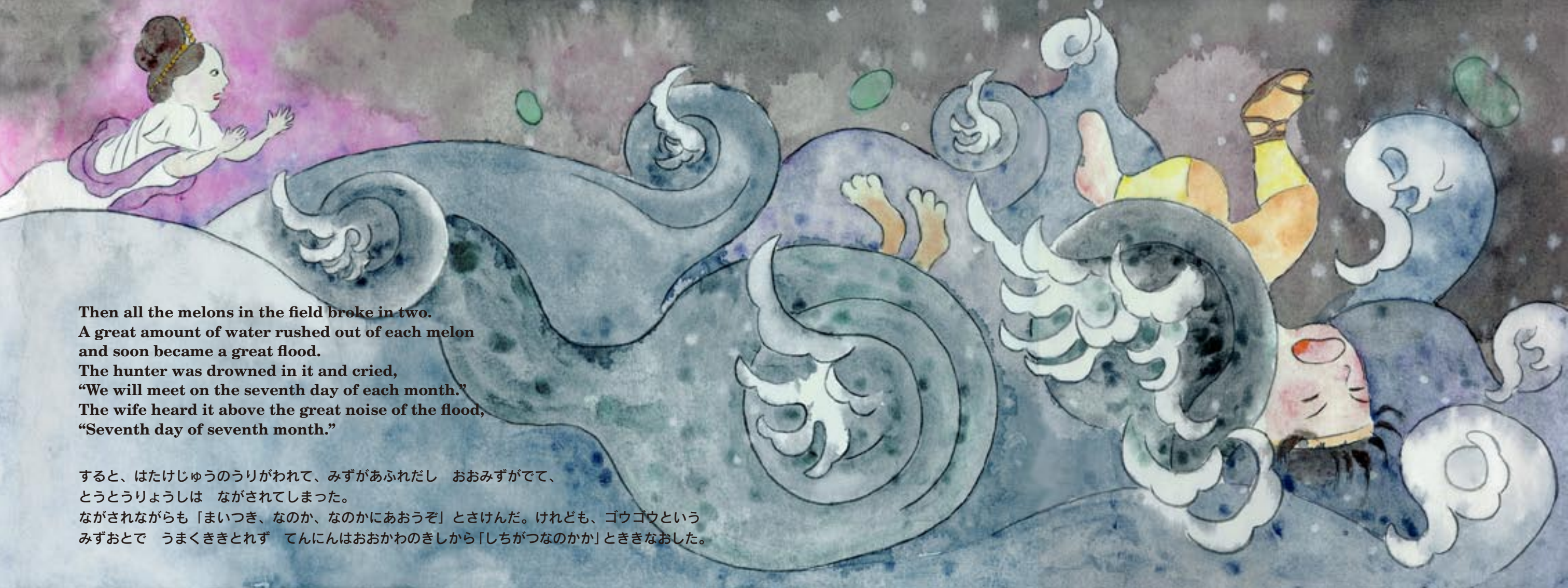




**It was mid-summer and of course so hot that the hunter became terribly thirsty. The hunter could no longer resist the temptation to eat one of the melons. As soon as he cut the melon, a lot of water came rushing out.**

ちょうど まなつで、りょうしが うりばたけのばんをしていると、  
あつくて あつくてどうにもやりきれんから、ひとつくらいはたべてもよからうとおもって、  
ひとつもいできったら、きりくちからみずがあふれた。





**Then all the melons in the field broke in two.  
A great amount of water rushed out of each melon  
and soon became a great flood.  
The hunter was drowned in it and cried,  
“We will meet on the seventh day of each month.”  
The wife heard it above the great noise of the flood,  
“Seventh day of seventh month.”**

すると、はたけじゅうのうりがわれて、みずがあふれだし おおみずがでて、  
とうとうりょうしは ながされてしまった。  
ながされながらも「まいつき、なのか、なのかにあおうぞ」とさげんだ。けれども、ゴウゴウという  
みずおとで うまくききとれず てんにんはおおかわのきしから「しちがつなのかか」とききなおした。





**That is why, even to this day, the hunter, who became the Altair,  
and the wife, who became the Vega, meet across the Milky Way  
on the seventh day of July (the seventh month).  
The children became the two small stars you can see beside the Altair.  
That is the story.**

それでまいとし、しちがつなのかに、ひこぼしになったりようしと  
にようぼうだったおりひめほしが、あまのかわをはさんで あうのだそうな。  
ひこぼしのそばにならんだ ちいさいほしは、ふたりのこどもだそうな。







このえほんは よんだあと えほんのすくない フィリピンの しょうがくせいのおともだちへ プレゼントして あげてください。

●お礼とおねがい

この度は、贈る絵本を手にしていただきありがとうございます。

この絵本は、心のふれ合う機会が少なくなった日本の子ども達と、絵本を手にする機会の少ない開発途上国の子ども達のために、制作しています。日本の子ども達が読んだ後、下記の住所までお送りいただければ当会が責任を持ってフィリピン等の子ども達へお届けします。

この絵本をお子さんの意志で、フィリピンの子どもの達に贈っていただくよう保護者の皆様にご指導いただければ幸いです。大切なものだからこそ、心をこめて人にプレゼントすることの尊さを知ってもらいたいのです。

子ども達の明るい未来のために…。

「リコーダーをおくる会」代表 黒住宗道

「子ども達に絵本を送る運動」参加問い合わせと贈る絵本の返送先

〒700 岡山市中山下1-11-40 FITZ 8F 「リコーダーをおくる会」 Tel.086-225-7772

THE CHILDREN'S CULTURAL ASSISTANCE



This picture book is presented for you, by Japanese children, through  
THE CHILDREN'S CULTURAL ASSISTANCE.

●贈る絵本 通巻7号 「天人女房」

“The Sky Maiden” Japanese Text © 1997 Kazuko Inada. English Text © 1997 Tadaaki Miyake. Illustration © 1997 Naho Inada.

1997年12月7日発行／発行人 鎌田栄治／発売人 河口純一郎  
編集・発行 有限会社アルコプランニング 〒700岡山市中山下1-11-40 中山下黒住ビル 8F Tel.086 (225) 5015  
発売 有限会社温羅書房／印刷 コーホク印刷株式会社

この作品を許可なくして転載・上演・放送しないこと／万一不良本がありましたら、お取り替えいたします。



